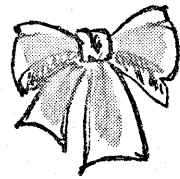


# 障害児を含む保育



河井 多喜子

引込思案の子どもや自閉的傾向の子どもたちと軽井沢の山荘で合宿し遊んだことがあります。トンボがたくさんいる広いグラウンドや白樺林など、ゆたかな自然の中での触れ合い、子どもたちと共に、心も身体も汗と泥にまみれる生活、ほとんどの子どもが明るく伸び伸びと過ごした一週間で、私も何かすばらしい体験をしたように思います。その経験は何回かの機会を得て積重ねられ、いろいろな子どもたちを幼稚園に受入れ、友だちになるきっかけになったのであろうと思います。

☆ ☆ ☆

聖ルカ幼稚園には数年前に、脳性麻痺のK君、自閉的傾向のEちゃんとA君が入園しました。

今まで病院や相談所にかかっていた子どもは引続いて密接なつ

ながりを持つように話し、連絡をし合うことにし、Eちゃんの場合には両親が、大きくなれば直ると信じていたので私もまた、いつのまにか両親の心と一つになり、たくさんの友だちとまじって、みんなと遊ぶ楽しさがわかればと思ひ、相談所の門をくぐることをすすめませんでした。

一五〇名の園児、八名の教師と一年間ふれ合っているうちに、春には手をつながなければ歩けなかったK君は間もなく手を離れ、秋には友だちとかけっこもするようになり、本来の明るい性質を取り戻しました。話が一方通行で泣きわめきかみついたり引っこいたりしていたEちゃんも、やがて奇異な行動は少なくなり笑顔で話したり、冗談も理解するまでになりましたし、言葉が全然無かったA君も、ある程度必要な言葉を使えるようになって、

それぞれ学校へ進むことができたのです。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

A君のことをもう少し詳しく述べて見たいと思います。

五歳で入園した時は全く言葉がなく、うめき声ともつかぬ声を発しながら園庭をいざり動いていました。

友だちがうたう歌詞の一部を言ったのは一か月ほどたったころでした。北陸、金沢の実家の祖母にうれし涙で電話をかけましたと母親が話してくれました。

散歩に出ると電柱の住居表示を読まれます。稲村ガ崎四丁目と繰返しているうちに、いつのまにか四丁目が言えるようになり、おんぶ、だっことますます言葉が増え、一年就学延期をして七歳で公立普通学級一年生に入学するころは、日常必要な言葉は使えるようになっていました。

一年生担任教諭・級友は仲間として、とても親切にしてくれました。授業中に彼が部屋を歩きまわる時、級友の一人は手もとの定規を持って彼のそばへ行き、それを持たせて席へ戻し自分も席へ戻ってハイハイと手を上げて、先生の間へ答えます。参観に行った時に見た光景です。学年末には三重丸いっぱいの国語帳・算数帳を持って、両親も本人も大喜びで幼稚園にきました。

二年生になった時、一年生の時の先生は教頭になられクラス担

任が変わりました。四月の新学期が始まり二、三日すると彼は荒れ始め、担任の先生からは「一年生の時の先生は何をしていたのか、幼稚園で何をやっていたのか、しつけがなっていない」と母親は大変なお叱りを受け一瞬にしてナラクの底へ……。

本人は幼稚園へ行きたいと言いつつ母親は必死の思いで相談に見える。教育委員会の先生は、現場の先生が気の毒とか、他の子どもの迷惑になると言われ、現在は特殊学級にいます。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

K・H君が三歳で入園した時は人にかみついたり、つねったり、髪の毛を引張ったり、牛乳ビンを投げつけてこわしたりするばかりで、言葉は「ママ」と「三菱マーク」ぐらいしか言えなかったのに、お友だちにも先生にも可愛がられて、いつの間にか乱暴しなくなり、五歳ごろはほとんど不自由なく話せるように進歩して、自宅近くの園で最後の一年を過ごし、小学一年生入学の日を迎えたことはまことに大きな喜びであります。

聾学校から移ってきた三歳入園のH君も、ペラペラさわやかに話すようになって、やはり自宅近くの園に移り、年長時代を過ごし、地域の小学校に入り普通学級で学んでいます。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

Mちゃんは、どっしりとした体格で動きは少なく、遊びに誘

っても「いやだ」というばかりでした。おとなが頃合いをみてお手洗いに連れて行こうとしてもテコでも動かないのに、友だちが手をつなぐとサッと立ってトイレに行く見事さ……。やがてままごと遊びのお母さんやお姉さんの会話などとても上手になり、友だちと楽しく遊ぶようになりました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

反抗心に燃え棒を振り回してはエイ・ヤーと口をとがらし眼をつりあげていばっていた知恵おくれのSちゃんも、新しい友を得て心やさしく育ち、一年間のおつきあいを経て今、元気に小学校に通っています。

毎日曜日には教会に行き礼拝を守っているのをとてもうれしく思っています。Sちゃんが待っていてくれるので、こちらでもできるだけ休まずにと励まされているような現在です。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

Y君（自閉的傾向）M君（肢体不自由）のぶつかり合いはすばらしかった。

傘立てでY君が機嫌よく遊んでいた所へM君がはって来て、邪魔になる傘たてを、どかせようとしたのが原因で、二人のとっくみ合い、かみ合いの喧嘩が始まった。二人とも泣き泣き激しく、ぶつかり合う。

M君の母親がいたので途中で止められてしまう。（後日、母親の報告では止められたことが本人には大そう不満であった）

そのかん、足腰の立たないM君が、とっくみ合いながら立上がる。（担任の報告）

その直後、他の男の子をM君が真剣にはいはいで追いかける。

逃げる方は夢中で走りまわる。さんさん追いかけた後、おままごとの家に手をかけて、すつくと立上がり、振返って友だちを見た時のすがすがしい顔、なんと快い場面であったことか……。 （後半のさわやかな光景は私が見ました）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

S・FちゃんはM君と訓練会にも行きます。

「どうして みんなは 歩けるの！」（日々の園での刺激によって意欲の高まりへ）

「ぎょうこちゃんの家へ遊びに行くの」（一人前のつもり 友情へのつながり）

いつもニコニコしていてかわいい賢い女の子の最初の疑問とおうか、目覚めとおうか母親は大喜びで、目をまん丸くして話してくれれます。今まで訓練会や家での訓練は、いやでいやでたまらなかつたのだそうですが、このごろはお母さんのために、お母さんが喜ぶからと言って訓練をしているそうです。



S・Fちゃんの泥んこ遊び

園では、生き生きと、とても楽しく遊んでいます。泥んこもへちやらになりましたし、ままごとも得意中の得意なのです、べったりすわってご馳走つくりなどしていますが、必要なものがテールの上にあると、一人で何かにつかまりながら気軽に立ち上がって取ります。何度でも、おっくうがらずにやります、だんだん人にも物にもつかまらず、暫らく立っていられるようになってきました。

☆ ☆ ☆

裏山はとっても急な坂みちです、道なき道、子どもたちの道です。熊の子のように四つんばいで少しずつ登ります。帰り(下り)は曲折した泥の滑り台、雨あがりでぬかるみの坂、または、カラカラ乾いて砂ぼこりの立つ坂は、良く滑って特に面白いのです。

Y子ちゃんも友だちに助けられながら登ります。手をしっかりとつないで頂上まで引上げるのに大変だったのに、草をわけ木にかまって登るようになりました。頂上では身体をすり寄せ、ほほをよせて来ますし、抱きついて笑顔を見せることもあり、なんにも言葉は言わないけれど、視線も合うようになりました。

Y子ちゃんが山からおりる時、最初のころはすべり台のように急な坂を、そのまま走って下り、前のめりになってしまっていて大変でした。一回ごとに上手になり、今では泥の滑り台を大いに楽し

むようになりました。みんなが頑張れ、頑張れと声援を送ってくれます。

こうして友だちにも、いたわり助け合う心がふくらんでいきます。もちろん、正義の味方は、なかなかきびしいこともありますが、みんな自分たちの仲間であるという意識や差別のない生き方を身につけていくように思います。

自由な形の保育の中で、個々の子どもに即した計画のもとに、六領域を楽しく利用しながら教育したいと考えます。

「おはよう」の言葉を、一定の時間集って一斉に挨拶して言葉として教え込まれて覚えるのと、朝、一人一人を迎えた時、その日初めて会った喜びをあらわし、人と人との心のつながりを深める言葉の一つとして、積重ねられるのとの違い、教えられてできるようになることより、一人一人の子どもの意志や力で学びとり、行動し進歩していくことを大切にしたいと考えています。彼ら、彼女ら、一人一人が充分に自分自身の力をのばし、一般社会の中で、幸せな日々を送ってほしいと思います。

現在は二五〇名の園児のうち、耳がきこえない、歩けない、言葉、かかない子どもなど合せて約一割いるのです。母親と保育者は手をつなぎ、いろいろ学び合っています。機会をのがさず講演を聞きに行ったり、話し合ったりすることは大切だと思います。

子どもをよくしようではなく、今日からそのままを受入れることだと思ふようになりました。障害児の心を聞くようにしてあげるのでなく、私自身が心を開かなければいけないのでは？ 目が見えない方が世界が美しく見えるとおっしゃったそうですが、耳の聞えない方も世界は美しく思われるそうで、彼らは私に光を与えてくれるのです。

遊び場のない 子どもたち

仲間がほしい 子どもたち

あの子もこの子も みんな入れるように

統合教育が特別の考え方でない日がくるように

タンポポ咲くみち、桑の実みのるみち、はぎのたれるみち

いろいろな子どもたちが、谷間の小さな園をたずねてきたのです

一緒に遊びたいなあと思ふのです。

(鎌倉聖ルカ幼稚園)